

平成28年度

第1回 徳島県いじめ問題等対策審議会 議事録

- 日 時 平成28年5月16日（月）10時から正午まで
- 場 所 県庁 10階 大会議室
- 出席者 14名（1名欠席）
- 議事次第
 - 1 開会
 - 2 (1)教育委員会あいさつ
(2)委嘱状交付
(3)自己紹介
(4)会長及び副会長選出
(5)会長あいさつ
 - 3 協議
 - (1)徳島県いじめ問題等対策審議会設置に至るまでの経緯説明
 - (2)いじめ問題等における課題
 - 4 閉会

会議の概要

2(4)互選により、会長に阿形委員、副会長に葛西委員が選任された。

【委員】

私は社会福祉士として福祉に関する相談や福祉等のネットワークの構築を業務としている。平成19年ぐらいから県内の学校等に派遣されて、家庭内の問題やいじめや友達関係のトラブルによって不登校となった子どもたちや、悩んでいる保護者の方たちの相談を受け、たくさんの人と会ってきた。今回配付された「いじめの認知について」（資料8）という資料を読んで、どんな小さなことでもいじめとして捉える。気づきの大切さを取り上げてもらったので、そのまま見過ごされることがなくなればと期待している。

表面化しているのは、不登校であってもいじめや家庭の問題であっても、家庭環境だけでなく、多くの要因が絡み合っており、その子どもだけの問題として捉えるだけでは根本的な解決にはならず、支援が必要だったことがたくさんあった。悩んでいる子どもたちは、声かけをしてもらえることや相談できる人がいてくれるだけでも違いがある。資料8に具体的な事例が載っていたが、いじめとしての認知に開きがあるということだった。これは痛みと同じようにその人の痛みはその人しかわからないように、たとえ相手の立場になったとしても心の傷つき具合とか深さは計り知れないと感じる。だからこそ、常に自分の価値観を教えない、押しつけない、痛みや考え方に個人差があるということを意識することが、気づきの第一歩で、大事なことと常々思っている。

徳島県もいじめをいじめとして再認識して認知件数が増えたとなったのは、少しずつでも先生方の気配りや意識の改革が進んできているのではないかと感じている。いじめに取り組む担任のフォローは学校全体でしてほしい。それを一番感じている。今後はどういうふうに関向解決に向かったかとか、対応について、いじめられた生徒やいじめた生徒へのケアはどのように引き継がれているのかが知りたいし、重点を置いてもらいたいと思う。問題を抱える子どもたちは継続的な支援を受けられるように、次につないでいくことを忘れな

いでほしい。この会に参加して感じていることである。

【会長】

認知件数というのは一般的なわかりやすい言葉でないと思う。今、話があったように、とにかく見過ごさないことを第一に考えよう、だから疑わしきは拾っていこうという趣旨だと理解すればよいと思う。

「いじめゼロ」が究極の理想だが、大人の世界でも人間関係があれば何らかの軋轢が生じることがあるのは、当たり前である。新潟県では「いじめゼロ」ではなく、「いじめ見逃しゼロ」を目標に立てている。ほんの少しの言い換えだが、面白い発想だと思った。私たちの参考になるのではないかと感じた。

最後の方に「いじめられた生徒、いじめた生徒へのケア」という話があったが、私もそう思う。私は他県のいじめ対策の専門委員もしているが、早く対応しなければというプレッシャーが学校にかかり、その結果、謝罪の場を設けるのだが、形式的になってしまっていることがある。たった1回の「ごめんなさい。」で加害者の方も本当の意味の反省とか自己変革が起こるとは思えない。いろいろなことを含めて今の御意見、それぞれ大切なことと思った。

【委員】

先ほどの委員の話を聞きながら考えていた。私はスクールカウンセラーとして不登校の子どもと話をよくする。きっかけとして何か言われてとか、いじめられてというのがほとんどである。聞けばささいなことなのだが、それがきっかけとなって友達関係が悪くなり、孤立し、ちょっと学校に行きにくくなっている。誰かに相談できればいいと思う。いろいろな国に調査をしたところ、他の国といじめで違うのは「ちょっとおかしいんじゃない。」という子がいない。擁護する子がいない。いじめる子、いじめられる子がいて、他の国であれば「それはやり過ぎじゃないか。」という子が、日本にはほとんどいないというのが日本の特徴である。いじめている子に「やりすぎじゃないか。」というのは勇気がいるし、また、そこからいじめられるのではないかと思ってしまうということもよく聞く。しかし、周りの子がいじめられた子に「嫌じゃなかったか。大丈夫か。」と声をかけてあげる。止めなくてもいいので「見てたよ。しんどい思いしてるんじゃないのか。」と言えば、「いけるよ。ただ遊んでいただけ。」と言うのか、「じゃれてただけ。」ということもあるかもしれない。しかし、気にしてくれている友達がいて、「ちょっとしんどかった」と言えるだけでもずいぶん違う。そう言えば、「先生に言おうか。」「お母さんに言おうか。」「スクールカウンセラーに言おうか。」という話になるかも知れない。止めるように言おうとなるとハードルは高いので、「見てる子いるよ。」「わかってあげてる子いるよ。」というところからスタートするのがいいのかなと思う。

先生は力があるので、「それはいけない。」と言えるのだが、遊んでいるかどうかかわからないと思えば、「いけるのか。」と聞いてあげるとかならできる。そうすれば、先生も見ている。見えないところでやられているわけでないなと安心するかも知れない。

いじめとしてここには挙がっていないが、「性的いじめ」。つきあっている時に彼氏と彼女とかいろいろなカップルがあるが、写真を撮ってそれを別れた後に流す、流される。

「リベンジポルノ」と言ったりする。いじめの中で、下着の写真を撮るとか、そういったことを書かれるとか、そういったことも結構あるのだが、調査したところ「うちの学校でありますよ。」と言った先生はほとんどいなかった。しかし、子どもたちからは、「ありました。」という報告は結構あったので、このあたりの認知は隠れているので、挙げてい

かなければいけないと思う。

【会長】

スクールカウンセラーとして子どもたちの声を聞く中での意見だった。諸外国と比べていじめを止める存在が少ないというのは、いじめ研究で世界的第一人者のピータースミス博士が指摘しているが、世界と比較して日本のいじめを見るといろいろなことに気付かされる。

【委員】

いじめの本質的な議論ではないが、事前に送付された資料7を見た。文科省の課長の発言で「いじめの認知件数は多ければ多いほどよい。」というのは、前後の脈略の中で出てきた発言と拝察するのだが、この言葉は非常に大きな影響がある。この言葉だけが一人歩きして、保護者や子どもたちに誤解を与える危険性もあるのではと感じる。とにかく認知件数が多ければ多いほどよいというような言葉の取扱いには本県では慎重に行ってほしい。

【会長】

今の意見について、「認知が多ければ多いほどよい。」といった言葉には前後の話があることを私も知っているが、事務局から説明をお願いしたい。

【事務局】

「前後の脈略もあると思うが……。」ということだったのでそのあたりの説明をする。文部科学省の坪田課長からあった話は、いじめはたくさん認知してその全てに先生方が対応することがすばらしいんだということだったと思う。

【会長】

私もこの場において、坪田課長の話聞いていたので、前後を含めて説明すると、一番言いたかったのは、見過ごさない。見逃さない、ということを心掛けてくださいというメッセージだと私は理解した。

国立教育研究所が行った調査では、子どもたちに小学校4年から中学校3年までの6年間でいじめ被害、いじめ加害どちらも含めて一度でも経験したことがある者と問うと、9割近くの者が経験ありと答えている。課長はこのあたりも踏まえて、一定の関係の中ではほとんどの児童生徒が苦痛を感じたという事実があるにもかかわらず、学校から上がってくる件数は9割どころかバラつきがある。だからこれは実態把握ができていないのではないかと指摘されている。むしろ、何でも話ができるという関係性を作り、丁寧な調査をする中で、学校、教師が受け止めた件数が多ければ多いほど、実態をよく把握していることになるというニュアンスで私は聞いていた。委員が言うように、この言葉だけを切り取ると、非常に誤解というか、腑に落ちる言葉ではない。発生と認知と言う言葉を使い分けているのだが、世間一般にはそんな使い分けはわかりにくいので、ともすれば、いじめがあればあるほどよいとも聞こえかねない難しい言い回しをしている。はじめにも言ったように、見過ごさない、子どもたちの苦悩をできるだけたくさん拾い上げる学校を作りましょうと理解したらどうかと思う。

【委員】

児童相談所の職員としてきているので、虐待の早期発見・早期対応をお願いしたい。いじめと虐待は関係がないように思われがちであるが、いじめも虐待も力関係の中で起きている。

児童相談所としていじめのケースを対応することもあるが、いじめだけが単独で起こっ

ているわけでない。どうしていじめが起こったか聞いていく中で、いじめる側、いじめられる側の様々な要因やしんどさが重なって起こっている。児童福祉的な考え方であるが、虐待や貧困、子どもの発達、家庭環境、親の生育歴、失業、疾病などが複雑に絡んでいる。虐待は子どもに、人格的にも、精神的にも、身体的にも、大きな影響を与えている。この審議会の開催の目的の中にある生徒指導上の課題、非行・不登校・家庭内暴力・ひきこもり等の問題の根っこに被虐待などの生育歴があることも多い。逆に言えば、被虐待の影響が、いじめ加害に出たり、非行に出たり、家庭内暴力に出たり、学校での荒れに出たり、いろいろな問題の根っこになることが多い。いろいろな問題の根っこになることが多い。いろいろな分野の方がいるので、このような根っこの所をみんなで共有して、子どもが安心して生活できるように協力できたらと思っています。

虐待は、家庭内で起こることが多い。しつけとして親から叩かれたりするのも家の中である。子どもの前で夫婦げんかすることは面前DVとして心理的虐待として対応している。しつけや夫婦げんかなど家庭内で起こっていることは、外からはわかりにくい、見えにくい。児童相談所が虐待として認知できるのは、虐待通告を受けてである。子どもが学校で家の話をしたり、日記に「パパ叩くので怖い」と書いたり、顔にアザがあったり、先生に「昨日パパとママがけんかした」とポロッと言ったりして、虐待に気付いたり、発見できる。そういったサインを見逃されると、子どもたちを助けることはできない。そういった意味で、学校が抱え込むのではなく、早期発見、早期対応をお願いしたい。

【会長】

事案としては、児相では虐待の対応が一番多いということか。

【委員】

児童福祉法で児相は18歳以下の子どものことであれば何でも対応することになっているので、不登校から養護上の問題、子どもの性行の問題、ひきこもり、家庭内暴力など、何でも相談がくる。

【会長】

マスコミが理解していないところがある。いじめの態様のひどさに目を奪われて、本質を見失っているんじゃないかと思うことがある。マットでグルグル巻きにしたり、テープでグルグル巻きにして口の中にハチを入れたり、金を持ってこいと脅し、何百万と貢がせたりという事例もあった。そこに焦点を当て、こんなひどいことをしているのに、なぜ学校は気付かないのかという論理になる。しかし、ここまでエスカレートしたものは明白な少年犯罪である。学校が警察との連携をためらうわけでもないと思う。ただ難しいのは、そこまでエスカレートしていくまでの中に、委員さんが発言された「見えにくい」というのがある。

大阪大学の藤岡淳子さんは、「いじめというのは関係性における暴力」であり、見知らぬ他人の暴力の問題とは異なると指摘されている。いじめ防止対策推進法の中でも一定の人的関係という文言もある。一定の人間関係の中で起こる暴力ゆえの対応の難しさがあると思う。

【委員】

大事にしてくれなくてはいけない人からそういった扱いを受けることで傷付きがある。先ほどの委員の話にもあった、気付いてもらいたいのに気付いてもらえない。裏切られていくことが大きな痛手となる。

虐待も家族のことだからこそ言えない。迷惑をかけられないから言えないことがある。

だから難しいと思う。

【会長】

一定の関係があるからこそダメージも大きい。逃れられない関係性の中だからこそダメージが大きい。藤岡淳子さんは、いじめに近い問題は、虐待・ドメスティックバイオレンス・パワハラ・体罰等の問題だと言っている。被害を受けるまでは相手を求めている。その点も踏まえて議論することなしに、いじめの表面的な態様だけに目を奪われては、この本質はつかめないのかもしれないと思った。

【委員】

中学校と大学でカウンセラーをしている。認知件数という言葉が先ほどから何度も出ている。以前は警察にも勤めていたので認知件数、検挙件数という言葉はしみついている。発生件数と認知件数には開きがあって、暗数があり、先ほどの委員が言った性的ないじめなどがあると思う。

中学校では男性の相談者が少なく、女性の相談が多い。また男性は先生に勧められたといった経緯で来ることが多く、自主的に来るというのは少ない。大学では年々男性の相談が多くなっている。その中で対人不安を訴えるというのが多く、話を聞いていくと中学生の時に女子から悪口を言われた。例えば「キモイ」と言われたとか、その子が近づいていくと「キャー」と言って逃げられたとか、わかりにくいいじめを受けている、おとなしく真面目な子がいる。それがきっかけで人との距離の持ち方に自信がなくなったとか、自分自身のことを良いと思えないということと訴える。男子が小・中学校でいじめられたとは先生に訴えないのかなと思った。男子同士のいじめ、女子同士のいじめは目につきやすい。本人の訴えもあると思うが、男子が女子からいじめられているというのは、親にも訴えられないし、先生にも訴えられない。女性が元気になっているというのは女性の立場からは良いことだと思うが、女子がそういうことをしているということも考えていかななくてはいけないと思う。

今の子は対人関係能力が落ちていると思う。「大丈夫。」と声かけをする子がいなくて孤立していく。それをずっと引きずって、大人になっても人間関係がうまくいかないということを感じている。女性から男性へのDVというのも結構あると思うが、暗数というのをいかに掘り起こしていくかを考えていかななくてはいけない。

【委員】

「見過ごさない」ということが、いじめを防いでいく中で一番大事なことだと思った。

いじめからは少し話が離れるのだが、以前にニューヨークが荒れていた時期。死亡事件も多発し、世界で一番凶悪で危険な都市だと言われた頃、ニューヨーク市長の取組で変わっていった。ジュリアーニ市長がされたことは、窓ガラスが割れている所や、落書きなどをどんどんなくしていった環境を良くしていく、いろいろな所に目が届いているんだという風土を作っていくことに粘り強く取り組んだところ劇的に犯罪の発生率が下がって、その減り方はギネスブックに載るくらいで、世界が驚くような成果が出た。それは、小さなことを見逃さないということが大きな成果となった例である。こういう話を本で読んだときに、丁度私も中学校の現場で仕事をしていた。転勤をして荒れた中学校に変わっていった。最初の1週間、学校の様子を見てみるとゴミだらけだった。放課後、帰る前に掃除はするのだが、次の日の朝、始業時にはゴミだらけになっている。これは放課後、子どもたちが汚したり、社会体育の方が汚していくということもあつたりした。当時私は学級担任をしていたのだが、そういう状況がをあると感じていた。ある日、教頭先生が毎朝、ゴミ

袋を持ってゴミを拾う様子を見かけた。以前からいる先生に聞くと、その学校は伝統的に教頭が朝ゴミを拾うことになっているという。誰も教頭先生を手伝ってない。生徒も手伝わないという状況だった。そこで自分が持っているクラスの生徒に、「教頭先生が掃除をしてくれていることをどう思う。」という話をする。生徒が汚したんだから自分たちもやってみようということでクラスの子どもたち、また同じ学年の子どもたちがゴミを拾いだし、3か月もたつと校内にゴミがないような状況に変わってきた。学年で300人くらいいる中で毎朝毎朝200人くらいの生徒が、始業前に掃除に出てくるようになり、学校の雰囲気も変わってきた。これは1年生から始まったことだったのだが、問題行動や暴力事件も減り、いじめも減って学校が変わってきたという体験があった。教育環境が変わると子どもたちも変わってくる、規範意識も変わってくる、落ち着いた生活ができるようになってくる。

いろいろな指導も必要で、子どもたちを直接指導することも大事だが、学校設備や環境などを変えていくことによって生活も変わってくる経験を私自身したので、こういった部分から、小さいことからでも気付いて見逃さないことが非常に大事なことと感じている。

【会長】

委員の話は、「割れ窓理論」の考え方だと思う。ガラスが割れていることをちょっと放置しただけで大きな心のすさみになっていく。ゴミだらけの学校で清掃を徹底することから始めて、学校の荒れを立て直した例もある。問題はいじめなのだが、いじめだけを考えるのではなく、いじめを生まないような学校の文化、もっと言えば、当たり前前のクラスづくり、当たり前前の授業、当たり前前の学校文化づくりを、当たり前前に行っていくことがとても大事だと感じている。

【委員】

共通しているものがあると思う。規範意識という部分も含めて、いじめだけをなくそうというのではなく、学校全体を変えていく中でいじめも防いでいくというような取組が必要だと思う。

【委員】

資料6にグラフがある。いじめの認知件数で高等学校は小中と比べて少ない。現在は支援学校に行っているが、以前は社会の教員として普通科高校に行っていた。そこでは大きないじめ事案に出会ったことはなかったが、浮かび上がっていない事案があったかもしれない。言葉のからかいなどに直面したことはあった。今までの委員の意見も聞いていて、短いながらも教育現場での経験から言うと、教員の力量が重要だと思う。

先ほどの委員からもあったように生徒間で擁護があるというのが理想だと思うが、そういった正義感や使命感のある生徒は、クラスに一人なかなかない状況である。私は高校の状況しかわからないが、授業の中でも間違いたくないという気持ちがあるので、当てると間違わないようにすぐに教科書を開けて、正解を見つけて発表するという子どもが多い。そこで間違えたことによって知識を得ようと腹をくくった生徒は少ない。授業の中でもこんな感じなので、まして友人関係の中で、いじめかどうか間違いが許されないところでいじめと指摘しにくいと思う。こんな時代だからいじめのほうも巧妙になっているので、自分がいじめた後にいじめた子に寄っていく子がいらないかを見ており、次にその寄って行った子がいじめられる対象になるということもあると聞く。だから生徒から手を差し伸べにくくなる。そうすると学校の中では、教員という存在を強く示しておかないといけない。私自身が心がけていることは、その子が嫌がっているかどうかはわからないが、「先生は

今の言葉遣いは嫌いだ。今の発言は嫌いだ。」と私は言うようにしている。生徒に今の嫌だったかと訊くと「嫌だった。」と答えれば矛先がその子に向くと思う。「お前が嫌だといったから先生に怒られた。」ということになる。生徒の自浄作用ということに期待したいが、できない。周りを気にする生徒なので教師が嫌われ役を買って出ることが大事。

もう一つは、ネットのいじめが発見しにくいと現場でいて思う。男子生徒の裸の写真をメールで送ったということがあって、その送られた子が別の子に送ったということだった。本人が悪ふざけでしたことで、いじめではなかったのだが、広まってから教員に伝わってきた。関係者にメールは削除させたが、どこまで広がったら、教員が情報をつかむことができるかというのが非常に怖いと感じた。学校によっては先生がネットパトロールしているところもあるらしいが、SNSなど直接的な攻撃があったりするので、どう対策をするか、見つけていくかが問題になる。便利になればなるほど、巧妙ないじめを現場では恐れている。

【委員】

先ほどの委員からもあったように、SNSやコミュニティサイトを利用したいじめがある。本県では昨年中はなかったが、全国ではコミュニティサイトに起因したいじめが、発生している。具体的な例を言うと裸の写真を撮^{ひらう}ってそれをLINEで回したり、人のツイッターなどの投稿から発展し中傷したり、誹謗したりで、名誉棄損になる場合がある。

コミュニティサイトに起因する犯罪被害は、右肩上がりが増えており、去年は、全国で1650件余り警察が把握している。この種の事案は警察に相談があれば把握できる。親や先生に相談してから我々の耳に届く場合もある。また、警察安全相談、少年相談、いじめホットラインなどに直接電話をかけてくれれば把握もできる。いかんせん多くが匿名ということで、「名前は言えませんがどうしたらいいのでしょうか。」という相談も多い。いじめの相談に関しては去年55件あった。その多くが保護者からの相談であった。親が子どもの異変に気付く、変化に気を付けて、話を聞いて相談にきてほしい。子ども本人から聞くことが一番いいのだが、親と一緒にきて相談してくれれば適切な助言もできるし、対応もできると思う。今後も教育関係の方と連携を取りながら対処していきたい。

【委員】

私は保護者として、サポーターとしていろんな学校に行くことが多い。弱い者いじめは昔からあるが、子どもたちを見ていると、自分たちと異質な子、違う子に対するいじめとか敬遠することがあると感じる。授業の中の活動で、「2人組になって」「3人組になって」というときに「あの子いつも一人になっているな」という状況が見えたりする。その子の個性で考え方が違っていたり、身なりが違っていたりという部分があって、みんなから距離を置かれるということがある。そういうときには先生方に連絡して、大きな問題にならないように心がけている。そういう子どもたちに、保健の先生だったり、特別支援学級の先生だったり、校長室で校長先生と話をしたりして寄り添う居場所づくりを学校側が作ってあげているなど感じている。

子どもたち自身は大人を見て、この大人は信頼できるとか、信頼できないというのを敏感なアンテナで瞬時に判断していると感じる。先ほどの話にもあった教員の力量というか、先生方に子どもたちが言いやすいか、指示をちゃんと守れるか。指導を受け入れることができるかなどがあると思った。

ネットいじめということでは攻撃的な文言を出す、コメントを出すということがある。SNSでグループを作ったときにそのグループに入れず、自分の知らないところで自分の

知らない話をされ、自分だけ仲間外れになることがある。また、仲間外れになっていることに気付かない。もちろん先生方も大人も気付かないだけでなく本人も気付かないようなケースもある。

あと、小学校の高学年になるとスマホを「持つ」「持たない」という問題がある。それぞれの家庭で携帯電話やスマホを持たせたくないという教育方針もあると思うが、周りの子が持つことで「何時に待ち合わせで遊ぼう。」といったことをSNSで連絡する。スマホを持っていない子には連絡がこないことで、持たせたくないけど、子どもが仲間外れになるのは嫌だから持たせようかなという悩みを打ち明けられたこともあり、難しい時代になったと感じた。

【委員】

学校でのいじめ認知について自分なりに考えてみた。ここ数年いじめに関する認知は変わってきたと感じている。以前であれば、いじめが起きると担任はショックを受ける。それは自分が見落としていたという責任感からショックを受けると思う。また、時にはいじめじゃないと思いたいこともあるのではと思う。しかし、この気持ちに押されていじめへの認知が遅れ、対応も遅れ、重大な事案になり、深刻化していくことになると思う。

ここ数年、我々教員にかけられる言葉は変わってきた。「いじめは残念なことだが、どんなに予防しても起こる。」「積極的に認知しよう。」「アンケートで0という数字が出たときにそれを喜ぶのではなく、子どもたちが正直に回答したかと受け止めよう。」そんな言葉が現場には下りてきている。だから、多くの先生は見逃さない。教員としても辛いことだが認知し、対応しようというスタンスに変わってきていると感じている。子どもたちも同じ気持ちでないかと思う。やはり自分のクラスが大好きである。ほとんどの生徒は自分の学校が大好きである。そんな学校でいじめが起こることに対してショックを受けると思う。認めたくないという気持ちになる子も、傍観者といわれる子の中にカウントされているかもしれない。正しい啓発を進め、向き合って、いじめを根絶するというスタンスで一緒に学校を作っていくことを進めていかなくてはいけないと思う。

さきの委員が言っていた生徒自治の向上、すごく大事だと思う。子どもたち自ら安心して安全な学校にしていこうという気持ちが認知の数を増やしていくと思うし、対応の効果を一層上げると思う。子どもにとって学校での一番の心の支えは教師でありたい。しかし、ある面では子どもだと感じている。多くの子どもの声を聞くと、友だちに救われた、友だちに助けてもらったという言葉が多い。私はそれでいいと思っている。ただ、子どもに全て頼るのではなく、子ども同士のつながりを作っていく。子どもが手助けできるような子どもに育てていったり、ポイントを抑えて助けてもらえるように関わってみたり、間接的に関わっていくことで子どもの心を救っていけるのではないかと思うこともある。もちろん緊急な場合は我々が前面に立って子どもを守ることもある。

【委員】

私も教師をしていた。ここにきて教師の初期の頃、生徒にいじめられたことを思い出した。学級が崩壊しているようなクラスになってしまった。なぜこのようになってしまったのかは、この時点で私はよくわかっていなかった。むしろ、「こんな悪い生徒たちがいるから自らが苦しむんだ」というような視点でいた。ところがある日、中学生とその母親が我が家に来て、もう、どの高等学校にも行ける状況でないので困っているという相談をしてきた。県外の私立の学校へ行かすしかないという状況であり、それが入試1か月前だった。近所の子で、よく知っていたこともあり、入試まで英語を教えることにした。毎日2

時間ほど勉強を見ることで始めたのだが、全然効果がなかった。短期間なので簡単なことから覚えさせようとして教えたのだが、次の回には前回したことが全く頭に入っていない状況だった。5分もあれば覚えられそうなものにもかかわらず覚えていない。この子は演劇をしていたので、セリフとか覚えられることを知っていたので、要するに覚える気がないとわかった。私は、「ボランティアで時間をとって教えているのに……。」といった思着せがましい思いで腹立たしさも倍増し、激しく怒った。^{しつた}「誰のためにやっているんだ。やる気さえあればなんでもできる。」といった感じで叱咤した。彼は下を向いてニコッと笑うような表情であった。そんな状況を1週間続けたが変化がなかった。さすがに鈍い私も何かあるのかなと思い、初めて聴く姿勢ができた。黙ろうと考えた。すると彼も黙って、私も黙って20分くらい沈黙があった。そうするとその子は涙をぽろぽろ流して、学校でのいじめの話始めた。その内容は外側にはわからない執拗で陰湿ないじめ。その子はいじめを避けるために先生の所に行って、先生方に気に入られる良い生徒だった。しかし、やられたことは授業中も放課後も休み時間も耐え難い苦しみがあったようだ。そんな話を聞いた時、私が生徒から反発を受けていることが、私のせいだったんだと思った。

目の前に、勉強が頭に入らないほどいじめられていた子がいる。こんなことがあると思ったこともなかった。生徒のことを知ろうとも思わなかった。聞こうとも思わなかったことに気付いた。自分の言うことを聞く生徒、自分をイライラさせない生徒が良い生徒という価値観を持っていたことに、このいじめられた生徒を通して気付いた。

見逃さない教師ということと言われていたが、私は見逃す教師だったと思う。自分は何も知らない、生徒から聞かせてもらいたい、教えてもらいたいという思いがないと聞こえないし、見えないんだと。現実が見えていても見ようともせずに否認してしまう。これを避けてしまうようなところがあると思わされて、教師が見逃さない目を持つということは、自分の生き方や考え方、自分の価値観を厳しい目をもって見ていかなければ難しいなと思った。

そんなことがあって、私は無能だと気付いて生徒の前に立ったとき、あれだけ私をいじめていた生徒が変わった。私は何もしていないのに、みんなから教えられたいと思ったことから、生徒が心を開いてくれたり、発言したり、温かく迎えてくれたり、奇跡のようなことだった。見逃さない目を持つ教師の視点を持つことが大事なことでないかと思わされた。

【委員】

2つ意見がある。1つはケータイのことである。いろいろな委員からケータイの普及によって見えないところでいじめがあるとの意見があった。このことは保護者の立場からでも感じる。

もう1つは不登校。毎年毎年、何人かがきていないということを聞く。しかし、学校の先生が真剣に取り組んでくれているので、「今日は先生が迎えに行った。毎日のように迎えに行っている」そのことで少しずつ学校にこられるようになって、きたときは、学校にその子の居場所を作ってあげる。別にいじめる子もおらず、「よくきたな。」「わからないところがあれば教えてあげる。」「一緒に遊ぼう。」など、生徒も先生もその子が学校にこられるよう、居られるよう協力しているという話が聞こえてきた。家庭でいろいろ事情があると思うが、親が「学校に行きなさい。」と言うべきじゃなかったかと思ったりした。学校と家庭と地域の人たちの協力の下、「学校行きなさい。」と声をかけることがあれば行けるのではないかと思った。協力することが大事だと思った。

【委員】

この対策審議会に出席することを高校生の息子に話し、「学校はどんな状況か。」と聞いたところ、「名前をもじってからかわれたことがある。」と言われ、それを聞いた後に3人の子どもに「どうやっていじめをやめてもらうようにしたん。」と訊いた。話が長くなるので要約して言うと、子どもが言うには、コミュニケーションをとることが大事なのではないかということだった。友だちに名前をもじってからかわれたときは、いじめてきた子は無視をして、違う友だちに寄って行って友達になった。中学校でいじめられたとき、先生に話をしたが、先生は「ふ〜ん。」という感じでしか聞いてくれなかった。それならということで違う友達に相談した。お母さんにも話をするし、お父さんにも話をするなどした。

テレビで自殺のニュースがあり、そのことについて話をしていると、「どうしてお母さんに言えなかったのかな。」「どうして友だちに話できなかったのかな。」という結論になる。今日、いろいろな委員の話を聞いて、共通することがたくさんあったが、先生とのコミュニケーション、地域とのコミュニケーション、友達とのコミュニケーション、親とのコミュニケーション、また関係機関とのコミュニケーションをとれるような子どもになったらいいのではと思う。

からかわれるようないじめから始まって、インターネット上のなかなか見つけにくいいじめもあると思うが、いろいろ勉強して、皆さんの話を聞いていけたらと思う。

※ 阿形会長が対策検討部会の委員に大野委員，佐藤委員，田岡委員を3名を指名し，同部会長に佐藤委員，同副部会長に田岡委員が選任された。